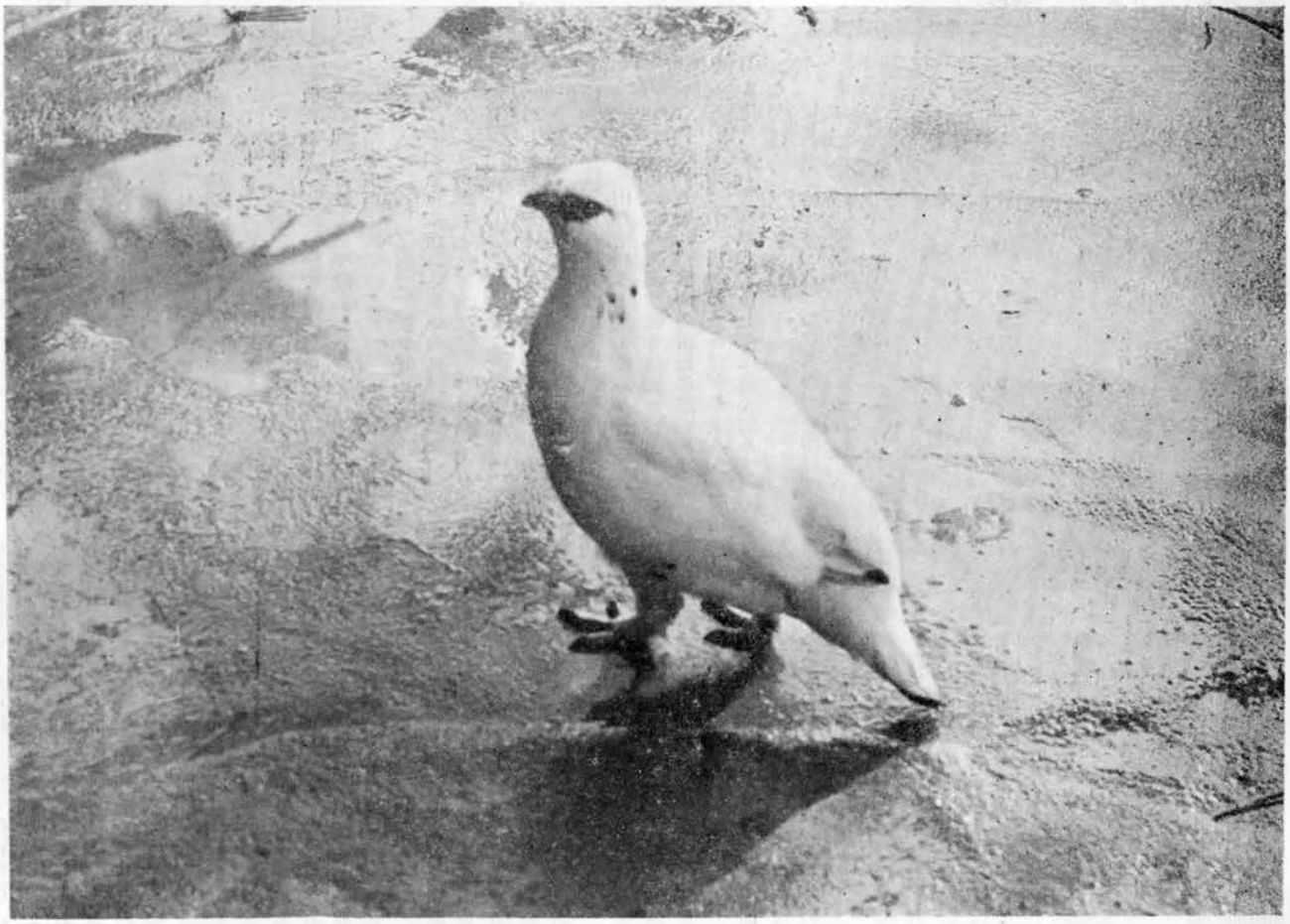
① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第15巻 第2号　1970年2月25日　大町山岳博物館



大町山博で産卵・孵化され、成長した若鳥（雄）　撮影（1970年2月20日）　海川庄一

低地で生まれたライチョウ

「ライチョウを低地で飼って増殖することができたら…。」そんな夢を抱いて大町山岳博物館がはじめてライチョウ卵の人工孵化に取り組んだのは、一九六三年六月のことでした。あれから七年余、ついに全くの低地生れのライチョウがおめみえしました。

一九六九年六月二十二日、大町山岳博物館の禽舎の中で仮親のチャボによって孵化された六羽の雛のうち一羽が、無事、若鳥にまで育ったのです。

この鳥の両親は一九六八年七月、日本北アルプス爺ケ岳において孵化し、孵化したその日から私たちの手で護られ、その後、現地の禽舎で育てられ、一九六八年九月に大町へ下ろされたのでした。

雌親鳥は昨年五月十八日から六月五日にかけて禽舎の中で十五個の卵を産みました。野生のライチョウの二倍も数多く産卵したわけです。しかし、どうしたわけか、それぞれの卵は日本アルプスで見られる野生のものに較べてだいぶ軽少な卵でした。他にも三羽の雌親が飼育下で産卵したのですが、何れも軽小卵だったのです。全部で四羽の雌親から四十九個の卵が得られ、一部は親鳥によって抱かれ、一部はチャボや孵卵器によって孵化され三十一羽の雛を得たのですが、完全に育ったのは前記の一羽の雄雛だけでした。

育った若鳥は五月十八日から二十九日の間に産卵され、五月三十日の夕刻から二十二日と十九時間ほどチャボによって抱かれて孵化その後も仮親によって育てられました。

九月中頃から仮親のチャボを真似て「クッ・クッ・クケーッ・カッカ」と、およそライチョウとは思えぬ警戒鳴きをするようになりたが、仮親と離されて五ケ月、現在ではようやくライチョウらしい「グウェー・ガーッ」という鳴き声が出せるようなりました。

（海川庄一）

歴史的にみた

雷鳥の捕獲と飼育

平林国男

1　記録のはじまり

我が国で雷鳥の生息がはじめて知られた年代ははっきりわからない。はじめは雷鳥らしいものが記録に現われ、その後の歴史の流れの中で次第にその姿が浮き彫りされてくる。そして、その過程はいれずも石川県の白山が舞台になっている。

雷鳥らしい記録のはじめは「三代実録」の一部に載っている宗叡僧正伝といえる。

「三代実録」は字多天皇の命令によって着手され、次の醍醐天皇の延喜元年（西暦　九〇一年）に完成したといわれ、この記録によると、叡山の神が叡山の僧　宗叡の徳の高いのに感心し、「汝の苦行は、吾将に認める所である。汝が遠くに行く時は二羽の鳥を随わしめ、道が暗ければ明るく照してやろう」と告げた。そして、宗叡が白山へ登ったところ、二羽の鳥が前と後に従い、夜通し火が燃えて道が明るかったという。

この伝説的な記録の真偽はともかくとして白山と不思議な鳥の物語りは、すでにこの頃からはじまっている。

その後、正治二年（一二〇〇）にまとめられた歌集「夫木抄」でライチョウという呼び名の記録がはじめて現われる。

後鳥羽上皇御製

「白山の松の木陰にかくろひて
　やすらに住めるらいの鳥かな」

従二位藤原家隆

「あはれなり越の高根に住む鳥も
　松をたのみて夜をあかすらん」

また、寛元二年（一二四四）の「新撰六帖」の歌集には三位九條知家の歌がのっている。

「しら山の雪のうちにも陰ふかき
　松をたのみて鳥や鳴くらん」

これらの和歌は、白山の雷鳥に思いをはせたものであるが、当時の人々はどのような鳥を雷鳥として認識していたかは全く知るすべもない。

宝永五年（一七〇八）の京都の大火が契機となって雷鳥の存在が広く世間に知れわたった。

この京都大火の際に御所も焼けたが、霊元上皇がおられた鑒水亭が類焼をまぬがれた。そこには画家　小武友梅の描いた雷鳥の絵に風早中納言実種卿が、後鳥羽上皇御製の白山の雷鳥の御歌を書添えたものが献上され掲げられていたという。この雷鳥の絵によって類焼をまぬがれたものとして、雷鳥の霊験あらたかなところが盛んに云いはやされ伝えられた。

もっとも、これ以前から雷鳥にまつわる火難や雷難よけの信仰があったものと思われ、それが実証された形ででたため、より効果が現われたものであろう。白山研究家といわれる玉井敬泉氏によれば、元和三年（一六一七）に創建された日光の東照宮陽明門の右脇の透塀の彫刻に雛を育てている雷鳥の姿が、また寛永二〇年（一六四三）に創建された金沢市尾崎神社本殿の蟇股（かえるまた）にも雷鳥の彫刻があり、いずれも当時の火難よけの信仰によったものであると述べている。

この頃から加賀藩は領内の町人や百姓を集め、白山や立山の雷鳥についての聴聞がはじまる。森田梯園編の「国事雑抄」や「温故集録」によると、

正徳元年（一七一一）には、加賀候前田綱紀が、白山・立山などで雷鳥を見たという金沢市中の人々から聞きただし、町奉行から云上させている。

「荒町山上甚兵衛、此者立山に一度参詣仕候処、材木坂を申所より三里許奥にて雷の鳥の由案内者申聞け其間三四間程にて見候処、雉子の雌の恰好にて、是より小さく、尾も短かき様に見受け、岩陰に隠れ候に付、たしかに見届け申さず、声も承り申さず候」

など、五名からの聞書が記されている。

発行者　伊藤東涯の図讃かある火難雷難よけの
　　柘本護符（「白山の歴史と伝説」より）

また、享保五年（一七二〇）には、「白山雷鳥御尋」という題で

「今般白山御用ニ罷越申時らい鳥え様子私見請申、らい鳥ハ雉子之めとり之大サニ而生栖之様子も雉子之めとり之通（以下略）
以上　田井村次郎吉せがれ喜兵衛
七月十八日
御算用場」

など、二名分の聞書が記録されている。

享保十四年（一七二九）伊藤東涯は、自から雷鳥を小武友梅に描かせ、風早中納言実種卿が後鳥羽上皇の御歌を書添えたものを拓本として、火難雷難よけの護符として出版している。当時の画家は多かれ少なかれこのような雷鳥の絵を依頼され描いたものであろう。そして、これらの絵が媒体となって雷鳥の存在はさらに広く世間に知れわたったと考えられる。

白山以外の山岳から雷鳥の記録が現われるのもこの頃からである。

立山における記録は前述の聞書に見られるが、立科山（蓼科山）の記録は宝歴三年（一七五三）の瀬下敬忠著「千曲之真砂」に見られ、立科山の雷鳥について形態や生態を記録して、白山に住むというライチョウのたぐいであろうと記述している。

八ガ岳天狗岳では、宝歴六年（一七五六）小岩商右衛門著「諏訪かのこ」で、岩鳥という名称で記録している。

明和四年（一七六七）には後藤光生著「雷震記」に、北アルプス乗鞍岳の記録がでる。これには、雷鳥の捕獲について記述されているが捕獲については次項で述べたい。

中央アルプス駒ガ岳では、安永八年（一七七九）葛上源五兵衛著「木の下蔭」に岩鳥という名称で記録され、さらに諏訪候が立科山の雷鳥を捕獲し、飼育したことにふれているが、これも次項でまとめて述べたい。

2　捕獲と飼育の記録

江戸期の記録

捕獲の問題で最初にでてくる記録は、前述の「雷震記」である。

「享保の初、飛騨国乗鞍岳に雷鳥ありと聞えしかば、有司承はることありて、数十羽捕へたれども、餌飼の違へる故にや多く隕ちたり、餌嚢を開き見るに、松実のみなりしかば、やがて松実をもって飼ひけれども それすら東都へ参りしは五六羽に過ぎず、是れも幾程もなく隕ちにき、風土の異なる故にや」

享保元年は一七一六年である。記録では正確な年代が不明であるが、いずれにしても一七一六年から後の早い時期に、殿様の命令で捕獲が行われ、江戸へ送っていることがうかがえる。風土が異なるためであろうと述べているが、短期間のうちにすべてを死亡させている。

延享元年（一七四四）には、再び乗鞍岳での、捕獲記録が見えている。筆者はこの記録を見ていないが玉井敬泉氏の「白山の歴史と伝説」（昭和三十二年（一九五七）によると、江戸の渋谷和泉守から飛騨代官宛に乗鞍岳で雷鳥の捕獲を命じ、結局三羽を江戸に送っているという。

「木の下蔭」（一七七九）の記録は、木曾駒ガ岳の雷鳥の形態や生態を記した後に

「ついて云 諏訪立科ケ岳にも此鳥あり先つ年諏訪候の命あって此鳥を取り 初め松かさにて餌つけ 後には摺餌につけ半年ばかりもかふ 暑気に至っていたみ斃ると聞伝ふ」

と記している。

「雷震記」「木の下蔭」ともに松の実で餌付をしようとしており、雷鳥の生息地が高山のハイマツ帯である点などの観察例から、餌はハイマツの実であろうと発想したものと思われる。また「木の下蔭」の場合、餌を摺餌にかえて半年ばかり飼育し、夏になって死亡させている。大町山岳博物館での飼育研究では、気温が上昇する七月下旬から八月にかけて、常に餌育上の問題が生じている。「木の下蔭」の場合にも同様な障害が現われたものであろう。

天保十二年（一八四一）には、白山における捕獲の記録がでる。山崎弘泰著の紀行文「山分衣」によると飛騨高山の山崎弘泰は、飛騨平瀬から大白川を白山に登り、親鳥一羽を捕えたが、打った石のため死亡させ、捕えた五羽の雛を懐中にしながら下山し、一羽は下山の折に岩をとぶ際誤って死なせ、四羽は大白川温泉に泊った夜中に死亡させている

明治、大正の記録

明治時代に入り、文明開化のかけ声とともに、各方面の学芸が、西欧諸国の進んだ学問を取入れて一斉に花開いた。雷鳥に関する研究もこの頃から本格的になる。

信州の博物学の泰斗といわれる河野齢蔵氏や矢沢米三郎氏によって、詳細にわたる雷鳥の形態や生態の研究が進み、両氏と一諸に仕事をした新家実次郎氏は、松本市で雷鳥を飼育し、換羽に関する問題を中心に飼育研究を行っている。この結果は信濃博物学会発行の「信濃博物学雑誌」第二十号（明治三十九年（一九〇六）六月二十日発行）を初回として継続的に掲載されている。

「（前畧）予が飼育せし雷鳥は、熟練なる猟師の南安曇郡鎗ヶ岳の山中に露宿すること五昼夜、其親鳥を射撃し、其屍体を以て雛を誘ひ、之を網したる者にして、九月より翌年八月迄生存したり。蓋し、雛の捕獲は殆ど絶後の業と謂ふべし。

当時捕獲せる雛は、二羽にして、「コケモモ」を以て之を養ひ、次で「アキグミ」を用ひたるに、一は死し、一は小鳥の摺餌を食して生存せり。爾来、虫類、野菜、米麦、粟、荏、胡桃等、殆ど食せざるものなし漸次飼主に馴れて、走り近づき、命令に応じて鳴聲を発するに至れり。（中略）

予が雷鳥は、八月二五日朝卒然斃れたり（後略）」

明治、大正期は学問研究のため、研究者による捕獲、あるいは我が国にはじめて移入されたスポーツ登山の思想に啓発された登山者や、猟師による密猟が多かったと思われる。

河野齢蔵氏は、信濃博物学雑誌第三号（明治三十五年（一九〇二）に雷鳥の形態や生態などについて報告し、その末尾で次のように結んでいる。

「此愛すべきライチョウも、猟師や、探険家の好下物となるので為に絶滅しはせぬかとの恐があります。此を保護鳥の中へ加へたのは、然るべきことです。」

雷鳥は大正十二年（一九二三）天然記念物として指定され、昭和三十年（一九五五）特別天然記念物になって国家の保護が加えられることとなった。

昭和初期から現在までの記録

昭和の記録は、第二次世界大戦が終ってから現われだし、それらはいずれもここ十年間に集中している。

昭和三十五年（一九六〇）八月、林野庁と日本鳥学会は、北アルプス馬白岳の雷鳥を富士山へ移殖した。雷鳥移殖の最初（次頁へ）

新家実次郎氏が飼育観察して写生した雷鳥

富士山にて　放鳥直前の雷鳥

〝安曇〟の名を冠した蛾

宮田渡

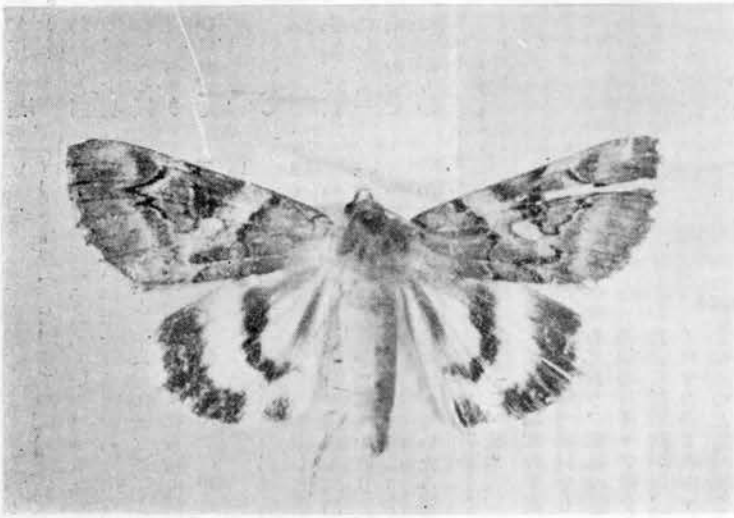
〝安曇〟の名を冠した蛾に〝アズミキシタバ〟というのがある。ヤガ科のシタバガ亜科に属している。一般にカトカラ Catocala と呼ばれているなかまである。

カトカラとは後ばねが美しいの意であるがじっさいに蛾の中でも最も美しい一群で現在までに、日本では二八種知られている。その中の一種がアズミキシタバである。カトカラ類の中でも小型なほうで、後ばねの後縁角に分離した黒紋をもち、内側の黒色帯は細く、内方へ曲っていることで近似種と区別がつく。私が白馬高校在職中、宿直室にこの蛾がとびこんできたのは、一九六〇年八月四日の晩であったしかし、これが雌であったため当時は種名が判明せずそのままになっていたがやがて雄がとれ一九六五年、杉繁郎氏によって Catocala azumiensis（カトカラ アズミエンシス）と命名された。

私が白馬村にいた頃は、白馬高校付近と二股の発電所および八方尾根だけに生息していたがその後この蛾はだんだんふえているようで、細野から深空、さらに佐野の方までその分布圏がのびているようである。おそらく佐野坂を越えて青木湖付近まで生活域をひろげているころであろうと想像される。新潟県の一部でも発見されているが、現在未知である幼虫の食樹は白馬村で発見されるだろう。幼虫飼育に興味をもつ方は、かたっぱしから幼虫を飼ってみて、一日も早く、何の木の葉を食べているのかみつけていただきたいものである。

将来、この蛾の学名が、他種の異名として整理されることがあっても、〝アズミキシタバ〟なる和名は残るであろう。

（木曾東高等学校教諭）



白馬村産　アズミキシタバ

（前頁より）の試みであり、大町山岳博物館では現地の捕獲について協力している。

この時捕獲した雷鳥は、白馬岳と旭岳の中間で捕えたもので、雄一羽・雌二羽・雛四羽（性別不明、孵化後約四十日）の計七羽である八月二十日に捕獲され、ヘリコプターで運搬し、二十二日に富士山の富士宮口三合五勺の小屋西北の方にある市兵衛沢（海抜二六〇〇m）へ放鳥された。

放鳥後の実態は昭和四十一年（一九六六）大町山岳博物館、信州大学教育学部生態研究会、山梨県立富士国立公園博物館、日本野鳥の会富士山麓支部の四者による合同調査によって、雄七羽、雌三羽の計十羽の生息が確認された。（信州大学志賀高原生物研究所研究業績五号）

生態とくに生活の実態（生活史）については、北アルプス爺ガ岳に生息する個体群を対象に昭和三十六年（一九六一）から三カ年をかけて、大町山岳博物館、信州大学教育学部生態研究会の合同調査によって詳細な観察調査が行われ、今まで不明であった多くの生態を明らかにした。（大町山岳博物館編「雷鳥の生活」）

昭和三十八年（一九六三）から大町山岳博物館では、前記生活史の野外調査と表裏の関係にある飼育研究を開始している。

高山生息現地から雷鳥の卵を採卵し、低地（大町山岳博物館　海抜七八〇m）で孵化・育雛を行なう作業、および、生息現地で保護し飼育・馴化した個体を低地へ持ち降して飼養する作業が含まれる。これら作業を通して現地調査では得ることのできない病理・生理・生態などの資料を収集することがねらいである。

昭和四十一年（一九六六）富山県では教育委員会社会教育課が主宰して人工孵化計画が立案され、立山の雄山周辺地域より採卵し、孵化・育雛する作業が開始された。（「ライチョウの人工増殖」（遺伝第二十巻第十二号（一九六六））。この作業は現在も継続されているが、このほか現地での飼育馴化による飼い鳥化の試みも行なわれている。現在は成鳥および雛は、夏になると高山生息現地へ運び上げ、冬期間は低地）芦くら寺部落へ降す移動飼育をしているようである。

昭和四十二年（一九六七）山梨県農政課と上野動物園は、南アルプス北岳で捕えた成鳥一つがいと雛三羽の計五羽を、秩父山塊の金峰山へ放鳥している。（「どうぶつ」二十五号（一九六七））。しかし、それについての報告書や記録が筆者の手元にないため、放鳥時や放鳥後の状況については全く不明である。

また、山梨県農政課では昨年（昭和四十四年（一九六九）から、南アルプス北岳の雷鳥を現地で飼育馴化し、大河原地籍（海抜一三〇〇m）まで降して飼育する作業をはじめ、現在も継続中であるが、これも記録がないため内容の詳細は不明である。

3　おわりに

我が国における雷鳥の捕獲と飼育に関する歴史的な流れについて、記録を中心に駆け足で眺めてきた。紙面の都合でアウトラインだけを拾い進んできただけであり、また、収集もれの記録や、記録に残されない例が数多くあるものと思われる。今後、諸賢の御批正によって充実したものにして行きたい。

なお、資料収集にあたっては、石川県白峰村村長　織田利太郎氏はじめ白峰村役場の関係各位、北国新聞社　高桑健二氏に多大の御協力をいただいた。古文書資料については富山県立図書館　広瀬誠氏から数多くの有益な御教示をいただいている。ここに厚く御礼申上げます。

（大町山博学芸員）

山と博物館第15巻第2号
一九七〇年二月二十五日発行
発行所　長野県大町市　大町山岳博物館　TEL②〇二一一
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円（送料共）（切手不可）